

# 文教大学大学院言語文化研究科 博士学位授与概要

申請者氏名	雷 雲恵	報告番号	甲第 6 号
学位の種類	博士 (文学)	学位授与年月日	2023 年 3 月 16 日
学位論文題目	日本語：接触場面における日本語母語話者の「フォリナー・トーク」に関する研究—母語話者の接触経験と非母語話者の日本語能力が及ぼす影響に着目して— 英語：An Analysis of “Foreigner Talk” Used by Native Speakers of Japanese in Contact Situation: Focus on the Influence of the Native Speaker’s Daily Contact Experience and the Non-native Speaker’s Japanese Proficiency		
審査委員	川口良 (主査：文教大学教授)、福田倫子 (副査：文教大学教授)、秋山朝康 (副査：文教大学教授) 長谷川清 (副査：文教大学教授)、高崎みどり (副査：お茶の水女子大学名誉教授)		

## 1. 論文内容の要旨

本論文は、日本語教育経験のない一般の日本語母語話者 (以下 NS) が、日本語非母語話者 (以下 NNS) との日常的な接触経験によって学習したフォリナー・トークについて解明しようとする実証研究である。NS 側の NNS との接触経験の多寡と NNS 側の日本語能力の違いが NS のフォリナー・トークに及ぼす影響について解明することを目的としている。Ellis (1994) が示した「フォリナー・トークにおける相互行為的調整のタイプ」の「談話管理」と「談話修復」に基づき、NS の「一発話の調整」、「自己修復」、「先取り発話」の 3 つを分析視点として、定量的・定性的に分析し、考察した。分析に用いたデータは、接触経験の多い NS 8 名、接触経験の少ない NS 8 名それぞれが、上級 NNS 16 名、初中級 NNS 16 名とペアとなつて行われたロールプレイ調査によって収集された合計 32 組、約 320 分の談話資料である。本論文は全 8 章 255 頁から成る。

第 1 章「研究背景及び研究目的」では、「多文化共生」が求められる日本社会において、一般の NS が用いるフォリナー・トークを解明することの重要性を指摘し、「接触場面」を NS と NNS の「共生的学習の場」と捉え、「フォリナー・トーク」を NS の接触経験や NNS の言語能力によって変わる「動態」と捉えることについて論じた。さらに、研究目的、分析視点について述べたあと、本研究の意義が、一般の NS のフォリナー・トークの使用実態を解明することによって、「やさしい日本語」の構築に貢献し、NS の「コミュニケーション力」の向上に示唆を与えることにあると述べている。

第 2 章「先行研究及び研究課題」では、フォリナー・トークに関する先行研究を辿って 4 つの観点から整理し、問題の所在を明らかにした。「第二言語習得」においては、フォリナー・トークは NNS にとっての「理解可能なインプット」であり、NNS の言語習得を促進する有効な手段として捉えられてきたことが示された。「日本語の一変種」として捉える社会言語学的観点からは、様々なバリエーションの存在が確認されているが、NS の NNS との接触経験や NNS の日本語能力に関する観点からの分析は行われていないことが示された。「共生言語」の観点からは、フォリナー・トークが NS と NNS によって構築される新たな日本語運用の仕方として位置付けられていることが分かった。さらに、「NNS との接触経験の違い」に注目する研究では、日本語教師を除く一般の NS の接触経験に加えて NNS の日本語能力を分析視点とした研究はまだ少なく、始まったばかりの段階であることが明らかにされた。そこで、本研究の課題として、1.日本語母語話者の接触経験と非母語話者の日本語能力は母語話者の「一発話の調整」にどのような影響を及ぼしているか、2.日本語母語話者の接触経験と非母語話者の日本語能力は母語話者の「自己修復」にどのような影響を及ぼしているか、3.日本語母語話者の接触経験と非母語話者の日本語能力は母語話者による「先取り発話」の生成にどのような影響を及ぼしているか、の 3 点を設定した。

第3章「研究方法」では、NSとNNSの初対面場面を設定し、日本観光に関するロールプレイ調査によって得られた合計32組の談話資料を、統計的手法を用いて量的に分析し、談話分析の手法を用いて質的に分析することを述べた。さらに、インフォーマント情報、データ収録の状況、研究倫理に関する手続き、文字化の方法などについて詳述している。

第4章「母語話者の「一発話の調整」について」では、研究課題1の解明を試み、NSの一発話の「長さ」と「話者交替」に注目して分析を行った。その結果、接触経験の少ないNSは相手の日本語能力に関係なく同じ長さで一発話を用いるのに対して、接触経験の多いNSは上級NNSには初中級NNSに対するよりも長い一発話を用いることが分かった。次に、一発話における「話者交替」を「受動的な話者交替」と「自発的な話者交替」に分類し、分析した。その結果、接触経験の少ないNSはNNSの日本語能力に関わらず、終止形で終わる短い一発話を用いるのに対して、接触経験の多いNSは上級NNSに対しては従属節を含んだ長い一発話を一気に話そうとし、初中級NNSに対しては短い一発話の中でもNNSの理解を確認するために意識的に「間」を置いて「話者交替」を行うことが分かった。NSはNNSとの接触経験によって、NNSの日本語能力に応じた効果的な「一発話の調整」に関わるストラテジーを学習していると考えられる。

第5章「日本語母語話者の「自己修復」について」では、研究課題2の解明を試み、「自己修復」の生起頻度、方法、発話連鎖に注目して分析を行った。まず、「自己修復」の生起頻度、方法を計測した結果、接触経験の少ないNSは、接触経験の多いNSより「自己修復」が少なく、NNSの日本語能力に関係なく頻度も方法も同じように「自己修復」を行っていることが分かった。一方、接触経験の多いNSは、上級NNSには文レベルや談話展開に関わる「再構成度の高い自己修復」を用い、初中級NNSには単語レベルの「再構成度の低い自己修復」を用いていた。さらに、発話連鎖に注目して談話を分析した結果、接触経験の少ないNSは、1回の「自己修復」で相手の理解が得られない場合は話題転換によってトラブルを回避する傾向が窺えたのに対して、接触経験の多いNSは、NNSが理解できるまで発話のトラブルを解決しようとする様子が確認された。NSは、NNSとの接触経験によって、NNSの日本語能力に応じて「自己修復」を効果的に行うことを学習していると考えられる。

第6章「日本語母語話者による「先取り発話」について」では、研究課題3の解明を試み、「先取り発話」の生起頻度、先行発話におけるNNSの「発話遂行滞り」、「先取り発話」の「情報の帰属」という3点に注目して分析を行った。まず、「先取り発話」の生起頻度を計測した結果、接触経験の少ないNSは接触経験の多いNSより「先取り発話」が少なく、対上級場面より対初中級場面の方が多いのに対して、接触経験の多いNSは、相手の日本語能力に関係なく「先取り発話」を多用することが分かった。次に、NNSの「発話遂行滞り」の有無によって「先取り発話」を分類した。その結果、相手の日本語能力に関わらず、接触経験の少ないNSは先行発話に「発話遂行滞り」が現れてから「先取り発話」を行うのに対して、接触経験の多いNSは先行発話に「発話遂行滞り」がなくても「先取り発話」を多用することが分かった。さらに、「先取り発話」の「情報の帰属」によって「先行話者に帰属する情報」「後行話者に属する情報」「共有情報及び一般知識」に分類し、分析した。その結果、接触経験の少ないNSは、初中級NNSの発話が滞った場合に「助け舟」として、「先行話者に属する情報」すなわち「相手に帰属する情報」を先取りして情報を補完したり確認したりするのにに対して、接触経験の多いNSは、相手の言いたいことや聞きたいことを文脈上の手がかりから予測し、相手と自分の情報や共有された情報、一般知識を活用して、「共同発話」を成立させる「先取り発話」を多用していることが確認された。NSはNNSとの接触経験によって、文脈上の情報を活用し、NNSと協働して「共同発話」を成立させる「先取り発話」を行うことを学習していると考えられる。

第7章「本研究のまとめ及び総合考察」では、4章、5章、6章の調査結果をまとめ、コミュニケーション・アコモデーション理論(CAT)を援用して、本調査結果の理論上の解釈を試みた。接触経験の少ないNSは、「一発話の調整」ではNNSの日本語能力の低さを想定したステレオタイプによって「過剰収束」し、「自己修復」では「維持・分岐ストラテジー」を用いていると考えられる。「先取り発話」では、基本的には「維持・分岐ストラテジー」を用いているが、NNSの発話が滞った場合には「収束ストラテジー」を用いると考えられる。そ

れに対して、接触経験の多い NS は、NNS の日本語能力に合わせて適切に「一発話の調整」、「自己修復」、「先取り発話」を行うことによって、相手との心理的距離を縮める「収束ストラテジー」を用いていると考えられる。以上のことから、NS は NNS との接触経験によって、CAT における「収束ストラテジー」を発達させていることが推測される。最後に、本研究結果を活用し、接触経験の少ない NS に対して提案を行った。

第 8 章では、「今後の課題」として、調査対象者の属性の調整（母語の統一と性別の拡大）、非言語行動の観察、NS と NNS の意識面の調査、などが挙げられた。

## 2. 審査結果の要旨

従来、母語話者と非母語話者によるコミュニケーションの場である「接触場面」は、非母語話者が抱える言語問題が顕在化する場であり、その言語問題を解決するために非母語話者が学ぶ有効な「言語習得の場」として捉えられ、研究が進められてきた。本論文は、このような「接触場面」を、日本語母語話者（以下 NS）と日本語非母語話者（以下 NNS）双方が学ぶ「共生的学習の場」（一二三 2002）として捉え直すことを出発点としている。在留外国人が増加し続け、グローバル化が進む日本社会において、国籍などの異なる人々が各地域の構成員として共に生きていくための「多文化共生」を実現させるためには、「非母語話者だけでなく日本語母語話者側にもコミュニケーション上の努力が期待されるべきである」（p.4）という、第 1 章の「研究動機」に述べられた主張は、執筆者が非母語話者であることを踏まえると、実体験に基づく「願い」とも受け取れるものであり、日本語母語話者に対して意識の変革を求める「非母語話者の声」とも言うべき研究動機と捉えられる。そのために日本語教育の知識や経験のない「一般の NS」が用いるフォリナー・トークを解明するという本論文の目的は、第 1 章で論じられたその重要性によって、十分意義のあるものであることが理解される。

本論文の新規性は、母語話者側の「非母語話者との接触経験の多寡」という分析視点に、非母語話者側の「日本語能力の違い」という分析視点を加えたことにある。会話参加者双方の要因が変化することによって生じる「フォリナー・トークの動態」を捉えようとする研究はまだ少なく、緒に就いたばかりの段階と言える。本論文によって導き出された結論は、柳田(2015)に続くフォリナー・トーク研究の新たな局面に、新しい研究成果を加えるものであり、日本語によるフォリナー・トーク研究にさらなる展開をもたらすものとして、高く評価されてよいと考える。

特に、第 6 章「先取り発話」の分析によって導き出された「接触経験が増えると、共有情報及び一般知識を活用した共同発話が多くなる」という結果は、本研究による「新しい発見」であり、接触経験によって NS が身に付ける重要なストラテジーと言えるものである。ここで示された接触経験の多い NS と上級 NNS との会話例は、親しい NS 同士のものに近く、接触経験が多くなることによって両者の心理的距離が近づくことを明確に示している。この「新しい発見」は、分析視点として、「NNS の発話遂行の滞り」だけでなく、「先行発話の情報の帰属」に着目して「先取り発話」を分析したことによって得られた研究成果であり、その着目点に「気づいたこと」が、評価されるべき本論文の独創性と考える。

フォリナー・トーク研究は英語及び日本語による多くの研究蓄積がある。第 2 章では、その先行研究を丁寧に辿り、4 つの観点によって整理して研究成果を明確に示した上で、その研究内容を吟味し、問題の所在を明らかにしている。フォリナー・トーク研究史の立論として、必要かつ十分な量の先行研究が取り上げられて丁寧に記述されており、日本語及び英語の読解力と高い文献収集力が示されている。その作業を通して設定された本論文の 3 つの研究課題は、適切であり妥当なものと言える。第 3 章では、研究の基盤となるデータに関して詳述されている。コロナ禍における被験者のデータ収集には大きな困難が伴ったことが推測されるが、倫理的な手続きを経て、日本語母語話者 16 名、日本語非母語話者 32 名、合計 48 名を集め、1 人の重複もない 1 対 1 の 32 組の会話という、量的な統計処理に耐えうるデータ数を収集して、文字化している。大量の会話データを、コロナ禍のさなかに収集し、文字化して談話資料として完成させた努力と高い研究意欲は、特に評価されるべき点であろう。

データの量だけでなく、調査対象者の属性（年齢、性別、社会的属性、接触経験の有無）も統一されており、質的にもほぼ均質なデータが収集されていることから、その後の論述の信頼性が高められている。

本論に当たる第4章、5章、6章においては、それぞれの量的な結果について適切な統計処理が施され、数値的に精確な結論が導き出され、それが適切な図表によって明示されている。その統計処理による有意差に基づいて、実際の談話を取り出して質的な分析が行われている。また、その質的分析は談話分析の研究手法の手順を踏んでおり、それによって導き出された考察は論理的で論旨の展開に一貫性があり、十分説得力が認められた。第4章では「一発話の調整」を調査した結果、柳田(2015)とは異なる結果が導き出されたが、その理由を調査対象と調査方法の違いに求め、説得力のある考察が述べられている。また、第5章で導き出された「自己修復」の結果についても、先行研究の結果と照らし合わせて吟味され、十分に論考されている。第6章の「先取り発話」については、先述したように、本論文による「新しい発見」となる調査結果が導き出されており、質量ともに本論文の中核を成している。NNS との接触経験によって NS の予測能力が高まり、協働的に共同発話が産出されるようになるという結論には、NS が接触経験によって NNS との心理的距離を縮めるストラテジーを学習していることが示されており、「多文化共生」へと繋がる有意義なストラテジーが把握されたと言えるだろう。

不足点、改善点としては、次のことが挙げられた。全体的に談話例が細切れに示されているため、会話全体の流れが理解しにくかった。「きれいな傾向」が導き出されたが、会話には「傾向」に収まらない「逸脱」もあるはずであり、例外を見つけ、それを説明することの重要性を理解してほしい。第7章「総合考察」の論述が不足している。そのため、コミュニケーション・アコモデーション理論（CAT）の位置付けが不明であり、唐突感が否めない。また、「7.3 接触経験の少ない NS に対する提案」の記述は、言語的研究成果と教育的提言を混在させており、違和感が大きく、「接触経験が多い／少ない」ことに対する執筆者の「価値観」や「評価」が感じられた。言語を扱う研究として、出てきた結果に「評価」を加えず、純粹な言語的特徴として精確に報告するという姿勢を堅持してほしい。フォローアップ・インタビューの調査が論考にほとんど生かされていなかった。会話におけるトピックの選択（観光地の選択）に注目すると、接触経験の有無による偏りが把握された可能性があるのではないか。「自己修復」の種類や「先取り発話」などの分類には、他の1名以上の分類結果と照合して一致率を求め、客観性を高める必要がある。直接引用の原文がそのまま表記されていないことが多い。t検定の結果に自由度が示されていない。対話相手のNNSの母語や国籍を統一する必要がある。今回はNNSの日本語能力の違いを優先してデータ収集を行っているが、NNSの母語や国籍は、「対外国人行動」（オストハイダ1999）としてのフォリナー・トークに影響を与える可能性があるため、今後NNSの母語を整理してデータを再検討してほしい。

以上のような不足点、改善点が指摘されたが、先に述べたように、「多文化共生社会」実現の担い手である一般のNSに注目し、これまで研究されてきた「NS側のNNSとの接触経験の多寡」という分析視点に、「NNS側の日本語能力の違い」を新たに加えて、量的にも質的にも十分に検討して示された分析結果は否定されるものではなく、その分析結果によって導き出された結論とそれに基づく論考は、当該分野における研究成果として十分に認められるものである。

2023年2月2日に行われた口述試験において、執筆者は説得力ある説明を行い、本研究の価値と意義が示された。よって、口述試験は優秀な成績で合格と認めた。また、本論文が示す日本語力と口述試験における答弁によって、執筆者が十分な外国語（日本語）能力があると認定した。

以上の審査の結果、本審査委員会は、本研究が博士学位を授与するに値する研究であると判定した。